

Agitato

電腦天使

成年向パラレル

PARALLEL ACT

はじめに

皆様、始めましての方始めまして。PARALLEL ACT 主催の TomOne です。最初に予告で電腦天使と書いてから、結局本を出せたのが今回です。それまで足を運ばせてしまった方には申し訳ございませんでした。

電腦天使が世に出て、今年は丁度 10 周年。偶然にもギリギリ間に合いました。あ、予告が出たのは 1992 年か？（^^；この間、電腦天使本が世の中に存在した事は知っていますが、手にした事はありません。果して、この本は世の中に存在する電腦天使の同人誌の何番目になるのでしょうか？ どなたか知っていたら教えてください。

さて、この本ですが、私の妄想の中から生まれた話なので、古雅ちはやさんの電腦天使とは設定が少し（大幅に）違います。微妙にパラレル入ってます。ま、でも同人誌なんてそんな物でしょう（マテ）。それに電腦天使（古雅ワールド）自体が、並行世界がいっぱいあるようなので、その中の一つと言う事で（無理やり）。

さて、この話は漫画版の終りの、約 2 年後くらいです。途中の話は、いずれ書きたいと思っています。できればフォル降臨の頃から^{*1}、前世^{*2}の話も。いつ書くことができるのかは分かりませんが、とりあえずはこの話をお楽しみ下さい。

*1 私の WWW ページに書いてあるのは、あくまで漫画版のノベライズです。

*2 古雅ワールドでは電腦天使 SS ですが、私の妄想では違います。

目次

はじめに	i
第1章 動き出す歯車	1
1.1 帰宅	1
1.2 二人羽織	2
1.3 発破	4
第2章 リア	7
2.1 リアの決意	7
2.2 リアの告白	7
第3章 フォル	11
3.1 貴也の告白	11
3.2 精神感応	13
第4章 明日	19
4.1 朝日の中で	19
あとがき	21

第1章

動き出す歯車

1.1 帰宅

フォル “あら、あの娘...”

ここは、フォルと、貴也が通っている大学。その校舎から、校門で待っているリアを見つける。

貴也 「フォル、帰ろうか」

フォル 「え？ いえ、私は調べ物がありますので、図書館に寄ってから帰ります」

貴也 「そうなの じゃあ、僕も手伝うよ」

フォル 「いえ、一人で大丈夫です。それにほら、校門でリアが待っていますよ」

貴也 「あ、本当だ」

フォル 「待ち惚けさせては可哀想ですよ」

貴也 「そうだね。じゃあ、フォルには悪いけど、先に帰らせてもらうよ」

フォル 「はい、お気をつけて」

貴也とフォルは別れ、貴也は校門に向かう。その様子を見届けると、フォルは大学図書館に向かった。

フォル “さて、‘何を’調べようかしら...”

女子学生 A 「ねえ、英君とフォルさんって付き合ってるんでしょ？」

男子学生 A 「え？ 俺はいつも校門で待ってる女子高生と付き合ってると思ってたぞ」

男子学生 B 「あの女子高生って、フォルさんの妹なんだから」

男子学生 A 「そうなのか？」

女子学生 A 「じゃあ、彼女の妹と一緒に帰っただけじゃない？」
男子学生 B 「毎日？」
女子学生 A 「え!? 毎日!？」
男子学生 A 「いつも一緒に帰ってるよな。やっぱり、あの女子高生と付き合ってる
じゃないか？」
女子学生 A 「でも、フォルさん悲しそうに見えたけど...」
男子学生 B 「まさか二股かけてるなんて事はないよな」
女子学生 A 「そんな、フォルさん可哀想...」
男子学生 A 「何にせよ、今度絞めといた方が良さそうだな」
男子学生 B 「そしたら、俺達にもチャンスが廻ってくるかも知れないしな」
女子学生 A 「結局、それが目的なのね」

1.2 二人羽織

貴也 「やあ」
リア 「あ、貴也もう講義終わったの？」
貴也 「うん、今日はもう終わったよ。リアはずっと待ってたの？」
リア 「そんな事ないよ。ついさっきから」
貴也 「そう、じゃ、帰ろうか」
リア 「うん」

商店街を歩いている途中、アイスクリーム屋の前で足を止める。

リア 「ねえ、貴也、ここのアイスクリーム屋さん美味しいんだって。買っていこ
うよ」
貴也 「なんだ、買い食いするの？」
リア 「皆にもお土産買っていけば、買い食いにはならないよ」
貴也 「そうかな？」
リア 「そ、ちょっと多めに買って、試食するだけ」
貴也 「それを買って食いって言うんじゃないの？」
リア 「細かいことは気にしない」

と、英荘全員、と買い置き分、袋にいっぱいアイスクリームと、2本のアイスクリー
ムを別を買ってくる。

リア 「はい、貴也」
貴也 「これ、僕が全部持つの？」

リア 「当然」
貴也 「でも、両手が塞がってちゃ、アイスが食べられないよ」
リア 「じゃあ、アタシが食べさせてあげる」
貴也 「いいよ、恥ずかしい」
リア 「恥ずかしい？ じゃあ、もっと恥ずかしくしてあげる」
貴也 「なんでだよ！」

と、リアは貴也の背中に飛び乗る。

リア 「二人羽織～」
貴也 「うわ、止めろって！ んぷ」

貴也の背後からアイスクリームを口に押し付ける。

リア 「ん？」
貴也 「何？」

よく考えてみると、この体制はリアの胸を貴也の背中に押し付けている構図になる。

リア 「ねえ、アタシの胸、分かる？」
貴也 「え...？」
リア 「アタシ、こないだカップ上がったの。気持ちいいでしょ」
貴也 “全然わかんないや ”
リア “ !! この！ ”
リア 「こら～！ ごつごつして固いってなんだ～!!」
貴也 「そ、そこまでは思っていないだろ～！」
リア 「おんなじ事だ～!!」
貴也 「止めて、苦しい～」
薫子 「あら、相変わらず仲良いのね」
リア&貴也 「!？」

リアが貴也の首を絞めているのを一旦止め、振り向くと、呆れて見ている薫子がいた。
リアは、顔を真っ赤にして貴也から離れる。

リア 「こ、これは貴也がアイスを食べられないって言うから...」
薫子 「首を絞めてたらアイスは食べられないんじゃない？」
リア 「それは貴也がアタシの...」
薫子 「アタシの... 何？」
リア 「.....」
貴也 「まあ、まあ、僕は気にしてないから」

薫子 「そういう問題じゃないんだけどな」

耳まで赤くなってパニックになっているリアを見かねて貴也がフォローに入るが、今一フォローになっていない。

薫子 「まあ、いいわ。それで、フォルはどうしたの？ 一緒じゃないの？」

貴也 「フォルは、『調べ物があるから図書館に寄って帰る』って」

薫子 「ふうん。それ、本当に調べ物があったのかしらね？」

貴也 「え？」

薫子 “フォルも貴也君も相変わらずね。こりゃ、あたしが一肌脱ぐしかないわね”

薫子 「うん！ ねえ、貴也君。今日英荘に行っても良いかな？」

貴也 「え？ 今から？」

薫子 「そ、今から。迷惑？」

貴也 「迷惑だ何てとんでもない。皆歓迎するよ」

薫子 「ありがと」

貴也 「じゃ、行こうか。アイスも融けちゃうし」

3人は‘登山’し始める。薫子は、密かな計画を胸に。リアは、薫子の気合いに不安を覚えながら。貴也は... 同荘生の来荘を単純に喜びながら。

1.3 発破

クレア 「では、岡田薫子のはえある前途を祝して、乾杯！」

一同 「乾杯!!」

薫子 「で、‘はえある前途’って何？」

クレア 「乾杯!!」

薫子 「ま、いいけどね」

いつものノリで、宴会はクレアが仕切り出す。久しぶりに薫子を迎えた事で、宴会は大いに盛り上がる。

料理があらかた無くなり、フォルが皿を片付けるために席を立つ。その直ぐ後に、薫子はフォルを追いかけて台所に行く。

フォル 「あ、薫子さん、ここはいいですから皆さんの所に戻っていらしてください」

薫子 「いいの。今日はフォルに話があって来たんだから」

フォル 「え？」

薫子 「貴也君から聞いたんだけど、今日は調べものがあったって遅くなったんだって？」

フォル 「ええ、そうですけど...」
薫子 「何を調べたの？」
フォル 「今度のレポートのために、」
薫子 「それ、後から決めたんじゃないよね？」
フォル 「え!? どう言うことですか!?!」
薫子 「相変わらず嘘が下手ね。顔に、理由を後付けしたって書いてあるよ」
フォル 「.....」

共同リビングでは、大分出来上がったクレアがリアに絡み始めている。

クレア 「をい、リア...」
リア 「何？ 姉さん」
クレア 「主役がいないわよ...」
リア 「薫子さんなら、さっきフォル姉さんについて行ったよ」
クレア 「呼んで来い...」
リア 「え？」
クレア 「主役を呼んで来いって言ってるんだ!!」
リア 「はいはい...」
クレア 「‘はい’は一回！」
リア 「は~い」
リア “ 薫子さんには悪いけど、相手させてアタシは逃げよ ”

再び台所。

薫子 「貴也君とリアと一緒に帰らせるために、調べ物があるなんて嘘を吐いたんでしょ」
フォル 「...嘘では... ありません。本当に調べ物を...」
薫子 「フォル、それで皆には嘘を吐いたことにならなくても、自分に嘘を吐いた事になるんだよ」
フォル 「あ...」
薫子 「なに遠慮してるの？ 貴也君のこと好きなんですよ!?!」
フォル 「私は...」
薫子 「リアのこと気にしてるんですよ。恋に遠慮は禁物よ。絶対に後悔するから」
フォル 「でも、貴也さんはリアのことを...」
薫子 「いいえ、貴也君はフォルのことを好きよ」

フォル 「え...？」

薫子 「でないと、あたしは諦めたりしなかったわ」

フォル 「薫子さん...」

薫子 「だから、フォルには諦めて欲しくないの」

フォル 「でも、私はリアを悲しませてまで、貴也さんと付き合うなんてできません...」

薫子 「いいえ、フォルは、本当はそう思っていないわ」

フォル 「え？」

薫子 「フォル、今でもリアの事を‘リア’って呼んでるよね」

フォル 「ええ...」

薫子 「どうして‘マリア’って呼ばないの？」

フォル 「それは...」

薫子 「‘マリア’と呼ぶと、貴也君とリアの仲を認める事になる。本当は貴也君を自分のものにしたいから‘マリア’と呼べないんですよ」

フォル 「!？」

手から皿が滑り落ち、何枚か割れる。フォルの頬を涙が伝う。

薫子 「あ、ごめん。そんなつもりじゃ...」

フォル 「あら、私、どうして... 涙が..... あれ？」

薫子 「ごめん。ここはあたしがやるから、フォルは部屋に行って休んでて」

フォル 「そんな、私がやります... あれ？」

薫子 「いいから、フォルは休んでて」

フォル 「はい、すみません... ううっ...」

フォルは、泣きながら台所を後にし、自分の部屋に向かう。その時、台所のドアの横に、リアが立っている事にも気づかず...

第2章

リア

2.1 リアの決意

フォルと薫子の会話を立ち聞きした後、リアも一人部屋に戻り、ベッドに突っ伏す。

リア “フォル姉さん...”

リア “諦めたわけじゃ、なかったんだ...”

リア “フォル姉さんが貴也のことを好きなのは分かってた...”

リア “でも、諦めてくれたと思ってたのに...”

リア “.....そんなわけ、ないか。‘好き’な想いは、諦められないよね...”

リア “アタシも諦められない。諦めたくない！”

リアの顔が変わる。強い想いを胸に、貴也の部屋に向かう。

2.2 リアの告白

貴也は、部屋でレポートを書いていた。薫子を迎えに行った筈のリアが遅いので、クリア自ら台所にいた薫子を引き摺り帰り、ひたすら酒を吞ませていた。クリアは、普段酒を吞ませもするが、主に自分で吞んで勝手に酔いつぶれているのが常だった。しかし、今日は断る薫子に無理やり酒を吞ませ続けていた。まるで、‘罰’であるかのように。身の危険を感じた貴也は、その場を退散していたのである。

貴也 「誰？ 入って良いよ。ああ、リアか、入って」

ノックに気が付いてドアを開けると、貴也はリアを部屋に招き入れた。

貴也 「どうしたの？」

リア 「貴也に、話があるんだ...」

貴也 「何だい？ あらたまって。じゃ、取り合えず座って...」
リア 「いい...」
貴也 「え？」
リア 「大事な、話なんだ...」
貴也 「.....」
リア 「.....好きです」
貴也 「.....え？」

リアは、貴也の目を真っ直ぐに、強く見つめて告白する。思わずたじろく程の気迫が感じられる。

リア 「貴也のこと、好きです」
貴也 「...何だい、急に」
リア 「お願い、返事を聞かせて！」
貴也 「僕だって好きだよ、リアの事」
リア 「本当に？」
貴也 「ああ、だって、僕らは家族じゃないか」
リア 「家族... そうじゃなくて!!」
貴也 「え？ 違うの？」
リア 「アタシは、貴也のことを‘家族’だって思った事はない！ アタシは... 貴也のこと... ずっと、一人の男性として見てきた...」
貴也 「リア...」
リア 「お願い... アタシのこと..... 一人の、女性として見て.....」
貴也 「.....」

リアは、涙を溜めながら貴也にすがり付く... それを貴也は、優しく抱き止める。

貴也 「リア、君の気持ちはとても嬉しい... でも、君のことは、‘家族’としてしか見れないよ...」

リアの眼から涙が溢れ、頬を伝う...

リア 「じゃあ、フォル姉さんは？」
貴也 「え？」
リア 「フォル姉さんはどうなの？ フォル姉さんも‘家族’だと思ってるの？」
貴也 「...う、それは...」
リア 「答えて!!」
貴也 「フォルのことも... 勿論..... ‘家族’だと.....」
リア 「嘘!! 貴也、嘘吐いてる！ フォル姉さんの事、‘女性’として好きなんで

しょ!!」

貴也 「……………」

リア 「お願い! はっきりと言って!!」

貴也 「……そうだよ。僕は、フォルの事を、一人の‘女性’として、愛している」

リア 「……………!!」

涙がどっと溢れる。思わず貴也を突き飛ばす。胸が痛い。締め付けられる。信じたくなかった事実、はっきりと言葉で聞くのは自分で望んだ事、でも、貴也の口から告げられた真実は、リアの心臓を貫いた。

無我夢中でその場を逃げ出し、自分の部屋に逃げ帰る。そのままベッドに入り、布団を頭から被る。

リア 「うあああ…! うわあああ…!!」

部屋には、リアの嗚咽が響き続けた…

第3章

フォル

3.1 貴也の告白

コンコン...

フォル 「あ、はい」

フォルは、涙を拭くとドアを開ける。

フォル 「あ、貴也さん」

貴也 「フォル、入っていいかい？」

フォル 「ええ、どうぞ」

貴也 「あれ？ フォル、ひょっとして泣いてた？」

フォル 「ええ!? そんな事ありませんよ」

貴也は、フォルの眼に涙の跡を見つけるが、否定される。貴也も、それ以上の追求しない。フォルも話を外らそうとする。

フォル 「それで、何かご用ですか？」

貴也 「うん。実は、さっきリアが部屋に来たんだ」

フォル 「え!? リアが！」

薫子に言われた事、さっきまで泣いていた理由と、貴也の口から出た人物が被り、焦りを隠せない。

貴也 「僕の事が好きだって...」

フォル 「貴也さんとリアは、仲が良いですからね」

‘好き’の本当の意味は分かっているが、敢えて別の意味を使う。

貴也 「僕の事を、一人の男として好きだって...」

フォル 「……それで、何て答えてあげたんですか？」

貴也 「『リアの事は‘家族’としか思えない』って」

フォル 「‘家族’…」

フォルの顔が一瞬明るくなる。リアは恋愛対象から外れている！もしかしたら、貴也は自分の事を好きなのかも知れない。しかし、ある可能性が脳裏をかすめる。自分も‘家族’としか見られていないのではないかと。

フォル 「……………」

フォルは、期待と不安が入り交じりながら、貴也の次の科白を待つ。胸の鼓動が速くなる。

貴也 「フォルの事も、大事な‘家族’だと思ってる」

フォル 「!!」

フォルの顔が蒼白になる。眼に涙が溜る。

貴也 「でも、どうしてもこの想いは押える事ができない！僕は、フォルの事を、一人の‘女性’として愛してるんだ」

フォル 「!!」

フォルは、思わず両手で顔を押える。先程とは別の種類の涙が溢れ、頬を伝う。

貴也 「最初に、フォルと出逢った時からずっと、フォルの事を好きだったんだ」

フォル 「……………」

貴也 「フォルは、どう思ってるの？僕のこと…」

フォル 「私は…！私も、貴也さんのこと……」

フォルは直ぐにでも肯定したい気持ちに駆られる。しかし、肯定するわけにはいかない。リアには、貴也と結ばれ、マリアとなり、子を生む使命がある。自分にはそのような使命は無い。もし自分がリアから貴也を奪った場合、リアは使命を果たす事ができない。

フォル 「‘家族’、だ… と……」

貴也 「本当に？」

フォル 「はい…」

貴也 「それだけ？」

フォル 「はい……」

貴也 「なら、どうして泣いてるの？」

フォル 「……………」

さっきよりも涙の量は多くなっている。否定したい。でも、出来ない。

貴也 「フォルの本当の、正直な気持ちを教えて欲しい！」

フォル 「私は... 私は.....」

貴也 「僕は、フォルじゃなきゃ駄目なんだ!!」

フォル 「.....ありがとう... ございます..... でも、やっぱり私...!？」

貴也は、いきなりフォルの唇を塞ぐ。唇を通して、いや、それをキッカケとして、貴也の想い・愛情がフォルに流れ込んでくる。大きく、暖かく、力強い愛情がフォルの全身を包み込む。春のような温もりと、夏のごとき情熱が。

愛情に包まれることは、なんと心地好いのだろう。フォルは、全てを忘れて貴也に身をまか委せる。自然と瞼が綴じる。

3.2 精神感応

リア 「ひっく... ひっく... ひく.....」

部屋に逃げ帰り、泣き続けていたリアだったが、ようやく収まり始めた。

リア “ やっぱり、フォル姉さんには敵わなかったな..... ”

貴也とフォルの仲が良いのは、今までずっと見てきている。その眼差しが、他人に向けるそれと違う事も。自分に向けられるそれと違う事も。でも、貴也は優しい。優しさに浸っていたい、貴也は自分の事を好いていてくれる、それらの想いが、「貴也はフォルのことが好きなんだろう」と言う可能性を押しやっていた。

リア “ 諦めちゃうしか、ないのかな..... ”

仰向けになり、ぼ~っと暗い天井を眺める。

リア “ あれ!?”

リアは、ある異変に気づいた。熱く、優しく、大きく包み込むような感情が伝わってくる。自分を包む。

リア “ これ、何？ まさか!? 貴也!?”

そう、それは今現在貴也がフォルを包んでいる想いだった。その強い想いが、リアの精神に流れ込んでくる。

貴也 “ フォル!! フォル!! フォル!! ”

リア “ 止めて、こんなの... 酷過ぎる...!! ”

長いキスが続く。貴也の想いはさらに強くなる。フォルは貴也の愛情に包まれ、その心地好さに頭が朦朧としてくる。全身が火照り、身体感覚が無くなっていく。身体が宙に浮いてくる。フォルがただの‘人間’ならばここまではならなかつたらう。天使であるが為、貴也の愛情が直接精神に流れ込んでくる。

フォルの足は、自分の重さを支えることさえ出来なくなり、崩れ落ちる。貴也はフォルを抱き抱えるとベッドに寝かせた。そのままフォルに覆い被さり、キスを続ける。段々そのキスは激しくなり、互いに舌を入れ合う。

フォル “駄目... 溺れちゃいけない... リアが...”

貴也 “フォル!! フォル!! フォル!! ”

フォル “駄目... 止めて! これ以上呼ばないで...”

フォルは、貴也の想いを必死に撥ね除けようとする。しかし、身体がついて行かない。身体は貴也に浸る心地好さに溺れ、なおも貴也を求めようとする。腕は貴也を抱きしめて離さない。

フォル 「んく... ふぁ...!? ああ.....」

貴也が、フォルの胸をまさぐり始める。驚きの声はキスで封じられている。それに、拒否しようにも身体が動かない。貴也は服のボタンを外し始め、ブラをたくし上げる。胸が露にされる。貴也はようやく唇を放し、露になった胸を見つめる。

貴也 「綺麗だよ... フォル.....」

フォルは、朦朧としている意識と、上がっている息で答えられない。貴也は上着を脱ぎ捨て、上半身裸になる。さらに、フォルのスカートを引き下ろす。フォルの美しいラインが露になる。

貴也 「綺麗だ... 本当に綺麗だ.....」

綺麗だと言われて嬉しくもあり、恥ずかしくもある。今までも何人もの男達から言われてきたが、貴也から言われるそれは違う。何より裸に対して言われた事はなかった。

貴也が再び覆い被さり、今度は唇で胸をまさぐる。片方の胸の丘陵に舌を這わせ、もう片方を優しく撫でる。

フォル 「あ... くすぐった... あ！」

揉んでいた腕はそのままに、舌を下にずらし、腹に這わす。腹の筋肉がびくんびくと震える。

さらに顔を下げ、フォルのもっとも恥ずかしい場所に顔を埋める。

貴也 「あ、フォル、湿ってる...」

フォル 「 !？」

フォルは恥ずかしさのあまり声を失う。自分のあられもない姿を晒しているだけでも十分に恥ずかしいのに、自分の身体が貴也の刺激を感じている事を知られ、さらに言葉として現されるなんて...

貴也 「嬉しいよ、フォル...」

フォル 「ふぁ... あ.....」

貴也は、鼻でフォルの突起の場所を確認した後、頬でそれを擦りつつ、フォルの内股に舌を這わせる。更なる刺激が、貴也の頬を濡らす。それを確認した貴也は、フォルの下着に手をかけ、ゆっくりと剥がし始める。フォルの大事な部分と下着の間に糸が伸びる。貴也は、フォルの最も神秘的な部分を目の当たりにして、思わず唾を飲み込んだ。

貴也の動きが一瞬止った事に気づいたフォルは、顔を上げて覗き込む。

フォル 「キャッ!？」

貴也に自分の最も恥ずかしい部分を眺められている事に気づいたフォルは、思わず足に力を入れる。しかし、貴也を押し止めることはできない。貴也は顔を乗り出すと、フォルにむしゃぶりつく。

フォル 「ひゃっ!? ああっ!! あ...あ！」

フォルの敏感な突起を舌先で転がす。小さな穴に舌を差し込む。両脇の筋を嘗める。

フォル 「ああっ!! あっあっあ...！」

溢れる愛液、混ざり合う唾液。フォルの股間と、貴也の口元は既に水浸しになっている。さらにシーツまで濡れ始める。

貴也は体を起すと、ズボンとトランクスを脱ぎ捨て、フォルに覆い被さる。自分の物を持ち、フォルの秘部に当てる。ピクッ!! フォルの身体が強張る。目は、しっかりとフォルの目を見つめる。お互いの鼓動が高まる。精神が高揚してくる。

貴也 “ 僕はフォルを愛している！ フォルと一つになりたい!! ”

フォル 「.....」

フォルは、貴也の真剣な瞳を逸らせない。フォルに不安は無い。ただ貴也の真剣な眼差しと想いに吸い込まれるだけ。

貴也 「.....行くよ...」

フォル “.....”

フォルは貴也に全てを委ね、目を閉じる。その瞬間!!

リア “ 嫌あ!! お願い! やめて!! ”

フォル 「リア!？」

貴也は、ゆっくりと身体を進め、フォルの中に入って行った。

リア 「うあ... は..... ああ.....」

リア “お願い... やめて... もう、許して.....”

貴也の強い‘想い’がリアに流れ込んでくる。フォルを愛撫している感覚が自分にも伝わって来て、まるで自分が愛撫されているかのような感覚になっている。しかし、その‘想い’は本来フォルに対してのもの。つい先程、想いを遂げ事ができなかった相手が、別の女性、しかも実の姉に向けているもの。それは、リアにとって拷問にも等しいものだった。

貴也の‘想い’が、自分の唇を、胸を、陰部を愛撫する。本来ならば純粋に心地好い筈なものなのに、今のリアにとっては半分苦痛として感じられる。しかし、身体が反応しているのが自分でも恨めしかった。今までも天使の、人間の心を読み取る能力を恨めしく思う事はあったが、今日ほど呪った事はない。

そして遂に、自分の陰部に、今まさに貴也が入って来ようとする感覚が来る。

リア 「嫌あ!! お願い! やめて!!」

フォル 「つ! ああ...」

貴也 「フォル、ごめん!」

フォルを破瓜の痛みが襲う。フォルは思わずしがみつく。貴也は、ゆっくりと身体を進めていく。

フォル “今の、何? リア? そう、リア...”

何故リアの声が聞こえたかまでを考える余裕はなかった。しかし、貴也の‘想い’に浸る心地好さと幸せで忘れていた事を思い出す。そう、リア。自分はリアのために、貴也と結ばれるわけにはいかない。

フォルの眼から涙が溢れる。身体の痛みと、心の痛みから。

貴也 「フォル、僕たち、一つになれたよ」

フォル “ごめんなさい...”

貴也 「フォルの中、とても暖かい... 今、フォルを感じてるよ...」

フォル “ごめんなさい... リア.....”

貴也 「フォル... 愛している...」

フォル “ごめんなさい...!”

貴也が再びキスをする。‘想い’は再び強くなり、フォルと、そしてリアに流れ込む。貴也の‘想い’がまるで麻薬のように作用し、心が満ちてくると同時に、身体の痛みが退いてくる。しかし、リアへの罪悪感は未だ消えていなかった。

貴也は、唇を塞ぎながら身体を揺らし始める。初めはぎこちなかったその動きは、段々とスムーズになって行く。

リア 「あ、あ、あ、あ... あっ！ くう...！」

リアの部屋で、必死に殺しても洩れてくる声が響いている。リアは貴也からの刺激に耐えられず、シーツを力一杯掴んでいる。掴んでいる部分は汗でびしょり。顔の辺りも、涙でびしょりと濡れている。シーツだけでなく、Tシャツも汗で濡れている。ジーパンの内側も...

貴也が、自分の中に入っている感覚がある。自分の中で、動いている感覚がある。

リア “貴也... 姉さん.....”

自分の中の、貴也の動きが激しくなる。身体の奥の圧迫感がひときわ強くなった瞬間、その部分が熱くなった。

リア 「あ.....」

貴也の動きが止まった後、自分の動きも止まる。悲しさ、悔しさ、惨めさ。涙が止めどなく流れ、シーツはさらに濡れていった.....

貴也 「ハアハア..... はあ.....」

フォル 「はあ..... はあ...」

貴也は、フォルを抱きしめたまま動かない。二人とも息が上がっている。貴也がゆっくりと身体を起こす。そして、自分の物をゆっくりと抜く。うっすらと血が付いている。フォルの中から、赤と白のまだらになった液体がこぼれ落ち、シーツを汚す。

貴也 「フォル... 愛している.....」

フォル 「ん... んく...」

再び、貴也はフォルに口づけする。

フォル “ごめんなさい... リア.....”

フォルは、リアに「すまない」と思いつつも、貴也の愛情に溺れる自分を止めることができなかった.....

第4章

明日

4.1 朝日の中で

雀の歌が聞こえる。朝日がフォルの寝顔にかかる。うっすらと瞼を開けるが、眩しくてまた閉じる。

フォル “私、どうしてたんでしたっけ...”

未だ頭がはっきりしていない。段々と、肌の感触が普段と違う事に気づく。柔らかい綿の感触とは違う、少し固い感触。布と肌との間に風が流れている。パジャマを着ていない。いや、パジャマどころか下着すら付けていない。自分が裸であることに気づく。

どうして裸？ 昨晚の情事の記憶が甦ってきた。ぼっ!! フォルの顔が真っ赤になる。

フォル “そうだ、貴也さんは？ 良かった... いない”

幾ら昨晚全てを見られたとはいえ、いや、全てを見られたからこそ恥ずかしくて顔を合わせる事ができない。しかし、いつまでもこうしているわけにはいかないの、ゆっくりとベッドから下りる。ズキッ!! 股間の痛み、思わず動きが止まる。ベッドを見ると、血痕と染みが付いている。恥ずかしさが増す。

服を着、髪を調えるとリビングに下りて行く。酒瓶とつまみの袋、さらに天使と人間が至る所に転がり、昨晚の惨状が目には浮かぶ。台所から朝食の音と香りが聞こえてくるので向かう。そこには、貴也が立っている。

貴也 「お早う」

フォル 「お、お早うございます！ 今日は早いんですね」

貴也の顔がまともに見られない。昨晚の事には触れないようにする。

貴也 「早いわ、もう9時だよ」

フォル 「えっ!？」

普段は一番早く起きて朝食の準備をするフォルが、9時まで寝過ごしてしまった。理由は明らかである。自ら地雷を踏んでしまった。

貴也 「朝食はできたけど、どうする？ 皆を起こす？」

フォル 「え!?! いえ、そっとしておいておきましょう」

貴也 「そうだね。多分、起きないし」

貴也とフォルは、久しぶりに二人だけの朝食を取る。会話は殆んど無い。食べ終わると、意を決してフォルが口を開く。

フォル 「あの、貴也さん。昨日のこと...」

貴也 「僕は、フォルの事を愛している。昨日の事は、僕の正直な気持ちだ」

フォル 「.....」

貴也 「君の答えを聞かずに、一方的だったのは謝るよ。でも、信じてるから」

フォル 「.....もう少し、待って頂けますか？ 私、その...」

貴也 「ああ。待つよ。ずっと。僕の気持ちは変わらないから」

フォル 「...ありがとうございます.....」

リア “.....”

そしてここにも、昨晚の事を決して忘れる事ができない者がいた。涙はとうに枯れ果てている。いつまでも、いつまでも、眩しさの中天井を眺めていた。

あとがき

ああ、ようやく電腦天使本を出すことができました。コミケット 62 のサークルカットに書いてから 2 年。電腦天使本を出そうと決めてからうん年。電腦天使が世に出てから 10 年ですか。長かったです。しかもいきなり 18 禁です(笑) フォル降臨から書き直したいとも思ってるんですが、一番書きたいシーンの一つだし、インパクトあるし(爆)でも、電腦天使が世に出てから 10 年ですからね。はたして読者に 18 歳未満はいるんでしょうか？ その時 8 歳ですからね(笑) SS からの人だと、それなりに若い人はいるかも知れませんが。

さて、作品のコメントです。なんか、貴也には前戯させちゃいました。「前戯無しで入れて、でも‘想い’が麻薬・麻酔の役割をして痛くない」としようかとしてたんですが、何か流れから前戯させちゃいました。無しの方が、貴也の想いが強く表現されたんではないかと思ってるんですが。ま、「前戯をしなければならない」事が貴也の OS に組込まれていたと言う事で(嫌な男だな(^_^;)。いや、貴也の‘優しさ’が前戯に走ったんでしょう。ラオールだとかうはいかないな。最も、この二人の場合、ベルの方がリードしそうだけど(笑)

今回、貴也とフォルが初めて結ばれる... 結ばれてないぞ(^_^; いや、身体は結ばれたし(爆) 相思相愛ではあるんですが、フォルはまだ素直になれてないですね、リアの事が気掛かりで。

で、リアですが、不幸になって貰いました。可愛い娘ほど不幸のしがいがあるってもんです(ヲ。他にも不幸の種はいっぱい用意してあります。今回、天使の能力により、貴也の想いが伝わって来て、「疑似セックス」みたいになりました。これがキッカケです。何のキッカケかは、リアの子供に関する設定を知っているならば分かるかもしれませんが。幾ら自分の妄想で設定変えてるとは言え、ある程度は元にはしていますから。いずれそれにまつわる話も書く予定です。

それでは、できれば夏コミでも電腦天使本を出したいな〜と。

誌名	Agitato
発行	PARALLEL ACT
発行者	村上 智一 (TomOne)
発効日	2003 年 12 月 30 日 (第 1 版)
URI	http://kikyousakura.ne.jp/~tomone/
E-Mail	tomone@kikyousakura.ne.jp

